

## 学校教育における筆順指導のあり方

### Way of teaching stroke order in school education

松岡 千賀子\*  
MATSUOKA Chikako

#### 1 はじめに

現行の学習指導要領「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(2017(平成29)年)には、書写に関する事項として「点画の長短や方向、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと。」という一節がある。つまり筆順は、文字の指導上、注意すべき事項の一つとして位置づけられているのである。一方1949(昭和24)年の「当用漢字字体表」では、「その文字特有の骨組みが読み取れるのであれば、誤りとはしない」という考え方が取られており、2010(平成22)年に改定された「常用漢字表」においても方針は継承されている。その結果、筆順指導の解釈には微妙な差異が生じ、個々の指導者に任せられているのが現状である。従って本論では、さまざまな筆順が許容されている事例を確認しつつ、筆順の必要性と学校教育における指導のあり方について考えてみることにする。

#### 2 教育現場の状況

近年の小中学校では時間数の問題もあり、筆順についてあまり多くの時間が割かれていないようである。東京近郊の公立中学校に通う生徒153名を対象に、筆順教育を受けた経験について調査した結果、

・筆順に関する指導を受けたことがない	6人
・筆順に関する指導を受けたことがある	143人
・受けたかどうか記憶がない	4人

という結果を得た。一見、筆順教育が盛んなようにも見えるが、さらに調査を進めてみると、筆順教育を受けた生徒の内、大半は「小学校の1年生の頃に先生が書くのに合わせて一緒に書いた」「ドリルを与えられて書く練習をした」(137人)という程度のものであり、中学年以上になるとほとんど学習していないという回答を得た。その一方で、「小学校時代にあまりにも筆順を厳しく言われて文字を書くことが嫌いになった」という生徒(6人)もあり、各教員の指導にばらつきがあることも明らかになった。以下は調査の際、2割以上の生徒が筆順を誤答した漢字である。(『 』部分を太字で記す。)

---

\* 学習院大学教職課程非常勤講師

- ア 飛 …4画目に『丨』。
- イ 牧 …「牛」は3画目に『丨』。
- ウ 道・起 …「首」の後に『しんによう』。  
「そうによう」の後に『己』。
- エ 右・左・馬 …「右」「馬」→2画目に『一』。  
「左」 →1画目に『一』。

飛 牧  
道 起  
右 馬 左

教育実習においても、板書の際に筆順の間違いを生徒に指摘されて狼狽し、授業の進行まで失敗してしまう、という学生がいる。特に中学生以下を担当する際には、事前にしつかりと筆順確認をする必要があるのだが、長年染みついた筆順を鵜呑みにし、思いもよらない漢字で指摘を受ける学生も少なくない。板書の筆順に拘るのは、主に小学生時代に厳しい教育を受けてきた中学生であり、学年が上がるにつれて意識は薄れていくようである。そうした一方で、ほとんど筆順指導を受けた経験がなく、「最終的に誤字になっていなければ書き方はどうでもよい」と考えている生徒もおり、筆順に関する意識は個人差が大きい。

従って、まず文部省（現・文部科学省）の「筆順指導の手びき」（1958（昭和33）年）において、筆順がどのように位置づけられていたのか確認してみることにする。

### 3 筆順指導の手びき

1958（昭和33）年に文部省から出された「筆順指導の手びき」には「筆順は正確で整った字を書くためのものである。原則はあるが、必ずしも一つの漢字に一つの筆順しかないというわけではない。」と明記されている。つまり筆順とは、「正確で整った字」を書きやすくすることを目的として作られたものであり、提示されている筆順以外の書き方を用いても必ずしも誤りというわけではない、ということである。実際、辞書や参考書の中で、異なる筆順が記されているのを目にする場合がある。また、漢字の祖国である中国とそれを取り入れた日本では、筆順の異なる文字も見受けられる。さらに文字の歴史をさかのぼっていくと、同じ文字でも書体によって筆順の異なる場合や、複数の筆順を持つ漢字も多いことがわかる。次にそれらの例を掲げてみたい。

## 4 さまざまな筆順

### 4-1 日本と中国の筆順

筆順の問題が議論される際、しばしば引き合いに出されるのは中国の筆順である。日本の一般的な筆順が『商務館小学生写字手冊』（2011（平成23）年）に記載されている筆順と異なる漢字を以下に例示する。

（『 』部分を太字で記す。）

イ「右」 日本 …「ノ」の次に『一』を書く。

中国 …「一」の次に『ノ』を書く。

〔日本〕                      〔中国〕  
右                              右

ロ「由」 日本…三画目に『丨』を書く。

中国…三画目に『一』を書く。

由 由

ハ「茂」 日本…草冠の次に『ノ』を書く。

中国…草冠の次に『一』を書く。

茂 茂

「正確で整った字」を書くためという文部科学省の目的から考えれば、イ・ロは日本・中国どちらの筆順でも字形に大きな違いはない。

一方、ハは「ノ」を先に書くか後に書くかによって草冠の下の「ノ」の起筆部分が上に伸びるか、「一」の起筆部分が左に伸びるか、という違いが生じる。このように筆順の違いが字形に影響を及ぼす文字に関しては、指導の際、注意が必要である。

・「ノ」を先に書いた場合

・「ノ」を後に書いた場合

#### 4-2 楷書と行書の筆順

次に書体による筆順の違いを取り上げてみよう。書道経験のない人に、文字の代表的な5書体（楷書・行書・草書・隸書・篆書）の内、楷行草の3書体はどのような順番で誕生したと思うか尋ねると、「楷書を早く書くようになって行書が出来、行書をさらに早く書いた結果、草書が誕生した。」という答えが返ってくる場合が多い。もしこの順番が正しければ、楷書と行書は同じ筆順になっているはずである。しかし実際には、楷書は隸書を簡体化・方整化することによって誕生しており、後漢から魏・晋時代に成立した最も新しい書体である。従って一点一画を正確に整えて書くに当たり、行書と異なる筆順が用いられるようになった文字も少なくない。以下がその例である。

例 イ「神」 楷書…「ネ」 = 「丿」 → 「フ」 → 「丨」 → 「、」  
(左に払った後で「丨」（縦棒）」を書く。)

行書…



(王羲之「集字聖教序」より転載)

(最後に「ノ」「、」部分をつなげて一筆で書く。)

ロ「至」 楷書…「一」→「ム」→「一」→「丨」→「一」  
(下部は「土」の筆順と同じ。)

行書… 

(王羲之「蘭亭序」より転載)

(下部は「丨 (縦棒)」から書く。)

ハ「分」 楷書…「ノ」→「夂」→「刀」  
(「刀」を最後に書く。)

行書…



(太宗「晋詞銘」より転載)

(「刀」の後に「夂」を書く。)

前記のような、楷書と筆順の異なる行書を授業で扱うと、多くの生徒は最初戸惑うようである。しかし、その戸惑いこそが文字への興味の糸口となり得る。残念ながら、現在こうした古典作品の筆跡に触れる機会は、主に高等学校の書道の授業に限られている。しかし、小中学校の段階でも目にする機会を増やせば、文字の成り立ちへの意識を高めることができる。筆順による字形の違いや書く際のリズムの変化など、日常の学習を通じて面白さや奥深さを伝えることは、文字という伝統文化を次の世代へ受け継いでいく上で必要不可欠である。

## 5 手書き文字と印刷文字

加えて近年は、パソコンの普及によって様々なフォントが普及している。字形も多様化し、手書き文字と印刷文字の違いも理解されにくくなっているのである。その結果、フォントによって画数が異なるように見えてしまう字形や、文字の細部に必要以上に注意を払う偏向が生じている。前者は漢和字典で総画索引を使う際等に影響が及び、後者は正誤の判断基準を誤る恐れがあるため、特に指導者は注意を払うべきである。

こうした傾向を受け、2016 (平成28) 年の「常用漢字の字体・字形に関する指針」(文化審議会国語分働会) では、漢字の字体・字形について詳しく解説するとともに、常用漢字 (2136字) 全てについて、印刷文字と手書き文字の違いを例示している。その主な例を以下に掲示する。

イ a 衣 b 衣 …「衣」は6画であるが、aは4画目が2筆に分かれているように見えるため、総画7と誤解する場合がある。

ロ a 心 b 心 …「心」は1画目が左の点であるが、aでは中央上の点から書き始めているように誤解する場合がある。

ハ a 令 b 令 … a は 3 画目・5 画目が線、b は点であるため、別の字と誤解する場合がある。

※ a はMS明朝体、b はHGP教科書体のフォントを使用。

イ・ロ・ハはそれぞれ画数・筆順・構成要素に誤解を生む可能性がある。指導者は、こうした手書き文字と印刷文字の違いを把握し、注意して添削にあたらなければならない。

## 6 おわりに

手書き文字の重要性が再認識される現在、筆順や字形について許容範囲の周知を徹底させる必要がある。その際、学校教育はあくまで規範を教える場であることを忘れてはならない。書の古典作品の鑑賞や毛筆を用いた学習によって興味を喚気しつつ、まずは基本と言われる筆順を押さえることを心がけたい。その上で、さまざまな筆順があることも認識させ、字形の変化や成り立ちへと視野を広げていけるような指導をめざすことが重要である。

### 【参考文献】

- 文部省調査普及局国語課編（1949年4月28日）『当用漢字字体表』
- 文部省、文部省初等中等教育局初等教育課編集（1958年）『筆順指導の手びき』
- 文化庁（2010年11月30日、内閣告示第2号）「常用漢字表」  
[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/.../index.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/.../index.html)  
2017年12月10日取得
- 鄒開華主編（2011年）『商務館小学生写字手冊』商務印書館出版
- 文化庁編「文化審議会国語分科会報告」（2016年）『常用漢字の字体・字形に関する指針』  
<http://www.bunka.go.jp>  
2017年12月3日取得
- 文部科学省「新学習指導要領」（2017年3月公示）  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1383986.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm)  
2017年12月3日取得